江東区の伝統工芸

木工（桶）
もっこう　おけ

桶製作は、水分を吸ってふくらんで合わせ目をきっちり閉じる木の性質をいかし、短冊形に割った側板を円筒形にならべて竹や金属でつくった細いタガで結んで固定し、底板をはめ、水を漏らさずにたくわえる容器「結物」をつくる技術です。

材料は樹齢300年を超える木曽産のサワラを用います。サワラは、年輪が緻密で揃っていることから均等に収縮する性質を持ち、また油分が多いため水や酸に強いことが特長です。

サワラを使った桶は、手に持てば軽く、木の香りもやわらかい、日本人によくなじんだ生活道具です。

現在、区無形文化財保持者である川又栄風氏が伝統の技を伝えています。

クレシゲで割って板をつくる

桶の外側を仕上げる

●容器の歴史

＝刳物（くりもの）＝

桶が普及する前には、木製の円筒形容器として、丸太を刳（く）り抜いて筒形に加工した「刳物」があり、弥生時代には使われていました。

＝曲物（まげもの）＝

飛鳥時代ごろには、檜（ひのき）などの針葉樹を薄く剥（は）いだ板を丸め、樹皮で綴（と）じた「曲物」が登場し、中世にかけて広く使われました。

＝結物（ゆいもの）＝

現在の桶となる「結物」が登場したのは平安時代末から鎌倉時代初期です。室町時代に入ると全国的に普及しました。短冊形の側板を正確に加工する技術が、このころに確立したものと考えられます。

江戸櫃

（洋白銀のタガとサワラの木地があいまってさわやかな印象を与えています）